

① 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「ぼく(橘 論里)は、クラスメイトの「轟(とどろき) 元氣(げんき)」や「水原(みずはら) 白(ましろ)」と共に、中学校の二十周年行事の実行委員として、キャンドルナイトを行おうとしている。次の文章はそれに続く場面である。

「ねえ、これ、見てくれない」

ぼくたちの前にファイルを置く。

「なに? これ」

開いてみると、中に収められていたのはぜんぶキャンドルナイトの資料だった。あちこちで行われたイベントを調べあげてきたらしい。公園で開かれた小さなものから、街じゅうを会場にした大規模なものまで、その準備過程や当日のようすなどをピックアップしてまとめてあった。

①「へえ、すげえ、やるじゃん水原」

元氣がのぞきこんで感心したような声をあげる。

つぎつぎページをめくっていき、終わりのほうまで来たところで手が止まった。そこから先はA夜の写真が並んでいる。実際のキャンドルナイトの風景だった。

夜の闇に、点々とうろそくの灯りが浮かんでいる。文字やハートをかたどったもの。階段状に並べられたもの。場所も形もさまざまだったが、どの灯りも暖かい色をしていた。しんとした炎(ほのほ)が静かに揺らめくのが、見える気がした。

しばらく黙って三人で写真をながめる。

「きれいだな」

ぼくが言うと、

「うん、きれいだ」

元氣も言った。水原は口を結んだままじっとファイルに「I」を落としている。

「でも、ほんとにできるのかな、これ」

他人事のようにつぶやいて校庭に顔を向ける。あの広い場所で、たくさんろうそくに火を灯すところを想像してみる。それは気の遠くなるような作業に思えた。

本当に、できるんだろうか、ぼくたちに。

まったく現実感のない話だった。

水原がB窓際まで歩いていつて窓枠に手をかける。

「できる、っていうか、やらなきゃ、でしょ? セツかくだから、あの校庭を光で埋め尽くしてやればいいじゃない」
窓の外を指さしながらこともなげに言っている。

「無理、無理、無理、無理。二十周年だから二十本くらいでいいじゃん」

元氣が言うと水原がにらみ返してきた。

「うっせ、まじで言ってるのかよ」

元氣が口の中でつぶやき、水原はあきれたようにまたくると校庭のほうを向いてしまった。ぼくは頬杖をついたまま、ふたりのやりとりを聞いていた。

(中略)

ぼくが歩道橋に「II」をかけると、水原も同じように階段を上ってきた。塾はこっちの方角らしい。無視するのも不自然だし、かといって並んで歩くのも違う気がして、ひどく気詰まりな空気が流れた。とりあえず思いついたことを「III」にしてみる。

「……さっきのあの資料さ、キャンドルナイトの。あれ、今度実行委員に持って行って、みんなに見てもらおうといいんじゃないかな。進藤先輩(せんぱい)とかも、参考になって喜ぶと思うけど」

ぼくが言うと、水原は後ろで②「うーん……」とためらうような声を出した。

「なんで、なんかまずい?」

「……そうじゃないけど。大丈夫かな」

「なにが」

「でしゃばりだって、思われるかも」

水原は立ちどまり、歩道橋の下に目をやった。

「あたし、気になったことはすぐ突き詰めちゃう性質だから。よく言われる。こだわりすぎとか、ひとりりで走りすぎとか。なんか、あんまりみんなとはテンポが合わないみたい」

歩道橋の下を、車が音をたてて流れていく。

「ほんとは、さっきの資料も見せようかどうか迷ったんだ。橘くんたち、あんまり乗り気じゃない気もしたし、……もしかして、またひとりで先走ってるって、言われるんじゃないかって思ったりして。あきれられるかもって思ったら、見せるのにちよつと勇気がいった」水原はそこで顔を上げた。どこかほっとしたような顔をしている。

「^③でも、よかった。とりあえずふたりともちゃんと見てくれたから。……まあ、轟くんはまだちよつと気が進まないみたいだけど。あの企画ね、あたし、ほんとにいいと思う。成功したら、きつとみんな、すごく心に残ると思う。だから、ぜったいうまくいってほしい」

水原は、本気でそう言っている。それがわかった。そしたら、ふいに首のあたりが熱くなった。水原はまだしゃべり続けている。「次の委員長、橘くんがやるんだって？ よかった。じゃあきつと大丈夫。さっきの資料、好きに使ってくれていいから」まっすぐに見られて、つい見返してしまった。一瞬、目の奥がふんとする。なぜかとつさに、まずい、と思った。

「あー、いや。うん、でも……」
 ④ 目をそらしながら言葉を濁す。水原の瞳の白い部分は、澄んだ水色をしていた。
 「楽しみだね、キャンドルナイト」

水原が先にたって歩きながらさっきより明るい声で言う。
 なんだか、今さら「委員長は無理」とか「まあ適当に」とか、とてもそんな言葉は口に出せなくなってしまった。それどころか、ほくの中で、少し気持ちが動きはじめてもいた。

頭にひとつの光景を思い浮かべる。
 暗くなった校庭に、静かに並ぶ無数のろうそく。それにひとつひとつ火が灯されていったとき、そこにどんな景色が浮かびあがるだろう。

やってみるのも、いいかもしれない。⑤ そんなふうに思えてきた。

(市川朔久子『紙コップのオリオン』より)

問一 — A — B — にあてはまる語としてそれぞれ適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ずらりと イ つらつらと ウ どつしりと エ すたすたと

問二 — I — III — にあてはまる語としてそれぞれ適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 目 イ 口 ウ 耳 エ 頭 オ 足

問三 — 線部①「へえ、すげえ、やるじゃん水原」とありますが、なぜ「元気」はこのように言ったのですか。理由として適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「水原」が、たくさんの学校のイベント情報をすぐに調べてきたから。

イ 「水原」が、自分で考えたキャンドルナイトの案を見せてきたから。

ウ 「水原」が、いろんなキャンドルナイトの情報をまとめてきたから。

エ 「水原」が、「元気」の興味がわきそうなイベントの情報を持ってきたから。

問四 — 線部②「うーん……」とためらうような声を出した」とありますが、このときの「水原」の気持ちとして適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の資料は、「進藤先輩」に喜んでもらえないかもしれないとためらう気持ち。

イ 資料を委員会に持って行くと、あきれられるかもしれないとためらう気持ち。

ウ 実行委員会で見てもらうには、資料の完成度が高くないかもしれないとためらう気持ち。

エ 資料を見せてしまうと、次の委員長をまかされるかもしれないとためらう気持ち。

問五 — 線部③「でも、よかった」とありますが、このときの「水原」の気持ちを四十字以内で説明しなさい。

問六 — 線部④「目をそらしながら言葉を濁す」とありますが、このときの「ぼく」の様子として適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 疑っている様子 イ 怒っている様子 ウ 急いでいる様子 エ とまどっている様子

問七 — 線部⑤「そんなふうに思えてきた」とありますが、このときの「ぼく」の気持ちを四十字以内で説明しなさい。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

僕はつねづね、「野生動物の獣医師のフィールド(現場)は外だ」と人に話しています。目の前の傷ついた鳥を救うために全力をつくすの言うまでもありません。しかし視線の先は、手術台の上の鳥を通して、窓の外へと向かっています。ここに来た鳥たちと同じ原因で野生の鳥たちが苦しんでいる。それをつきとめ、取りのぞくことが、獣医師としての僕のつとめです。

感電事故は、猛禽類(鋭い爪で他の動物を捕食する鳥)のケガや死の原因として大きな割合を占めています。これまでセンターに運ばれてきたオオワシの十羽に一羽が、感電のためにケガを負ったり命を落したりしたことがわかっています。

(中略)

対策をするなら、事故が起きたところから手当てをするだけでなく、ほかの多くのワシを救う「予防」にならなくては意味がないのです。しかし①それは、かんたんにできることではありません。まず、どんな工夫をすれば事故をふせげるかを考え、どれほどの規模で対策するかを考え、どれだけのお金と手間をかけられるか考え、作業をするときにどんな問題が起きるかを考えなくてはなりません。「オオワシは貴重な野生動物なのだから、対策をしてもらわないとこまります」と電力会社に言えばすむ、という話ではないのです。

これは、野生動物の保護に取りくむ人ならだれもがかかえる問題かもしれません。

僕は希少な猛禽類を死なせたくない。A、べつの人にとっては、②動物を守るより大事なことがほかにある。

寒さのきびしい北海道で電気が急にとまったら、場合によっては人の命が危険にさらされる事態を引き起こします。電力会社にとっては、そのような事態が起こらないように電気を確実に人々にとどけることが最大の使命ですから、オオワシはむしろ、停電事故を起こす厄介者かもしれません。ですから、「オオワシが大事だから鉄塔を撤去しろ」なんて、そうかんたんに言っていることではないのです。それに、「なにか工夫をしてほしい」と言われても、電力会社の人だって、なにをしたらいいかわかりません。

そこで僕は、③徹底的に準備をします。第3章でお話ししたように、ワシがいったどこにどうやってとまるのか、どんなものを取りつければとまらなくなるのか、実験をくりかえしました。そして、「こんな対策がありますよ」とこちらから提案するのです。

また、電力会社と話をするのに、「電気のことにはまったかわかりません」と言っていたのでは話し合いになりません。こちらが電気のことを勉強して、電力会社と対等に話せるぐらいにならないと、「電気のことをなにも知らない人が無理難題をおしつけてきているだけ」と受けとられてしまいます。それでは、相手を本気にさせることができません。勉強とはいっても、電気の専門書を読むということではなく、電気の専門家である電力会社の人とたくさん話をすることで、その会話のなかからヒントをもらい、知識を積みあげていくのです。

でも、話をしようとするときに、それぞれの人が自分の大事なことだけ見ていたら、a 目線が合わないままで、対話ができません。

B、テーブルをはさんで向かい合わせにすわるのではなく、同じ側にすわることが必要です。でもどうしたら、同じ側にすわれるでしょうか。

電力会社は停電につながる事故が起きてほしくない。電力会社は、b 不意に電気がストップするようなことが起きないようにする、大きな責任を負っているからです。そして僕は、ワシが感電して命を落とすようなことがなくなるようにしたい。オオワシやオジロワシは、絶滅の危機におちいつているからです。

ここに、「I」という、共通のゴール、が生まれます。同じゴールを持つことができれば、同じ方向を向いて歩き出すことができます。獣医師のフィールドは治療室にとまららない、と先ほど言いましたが、「外」とは、野外というだけでなく、こうしたこと「外」の活動なのです。

(斉藤慶輔『野生動物のお医者さん』より)

問一 A・B にあてはまる語句をそれぞれ次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア なぜなら イ だから ウ たとえば エ でも

問二 線部a「目線が合わない」b「不意に」とはどのような意味ですか。それぞれ次のア～カの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 相手を見下す イ 目をつむる ウ 考える方向が違う

エ 思いがけなく オ 意味もなく カ たまに

問三 「I」にあてはまる言葉を次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 野生のワシを事故から保護したい イ ワシが感電して起きる停電をなくしたい

ウ 電気を確実にとどけたい エ 人の命にかかわる停電をなくしたい

問四 線部①「それ」とはどのようなことを指すのですか。三十五字以内で答えなさい。

問五 線部②「動物を守るより大事な」とありますが、それが具体的に述べられている部分を本文中から十五字でぬき出しなさい。

問六 線部③「徹底的に準備をします」とありますが、電力会社の人と話をするために筆者はどのようなことを準備するのですか。四十五字以内で説明しなさい。

問七 本文に書かれた筆者の考えとして適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 野生生物の保護のために電力会社は有効な対策を考えなければならぬ。

イ 獣医師は野生生物の保護に協力するように電力会社を説得しなければならぬ。

ウ 獣医師は目の前の鳥だけでなく野生の鳥の保護も気かけなければならぬ。

エ 野生生物の保護のために電力会社は生物の行動について実験しなければならない。

三 次の詩を読んで、あとの問いに答えなさい。

池田 あきつ

地球の底から もり上がってくる
ひすいの色をみせて 青空をうつし
暗くきらめいて 闇夜をうつし
うねりにうねる うねりよ
A 陸をゆすつては うねり
空をゆすつては うねる

うねりの先に 白波を息づかせ
あらあらしく 息をはき
風をおこし 風を巻きこみ

① 陸にむかつてほえ 岩にあたって叫び
岸壁に突き当たってくだける

夜も ごうごうとほえつづけ
闇にひそむ 漁村の家々をふるわせ
窓を 戸を 打ち鳴らす

② 人々は 一部屋に集まり
押し黙って 火を囲む

海原へ 天からはしる白い一すじの光
子供が二人 窓に手をかけ
背のびして
ようよう 外をのぞき見ている

※ひすい……深緑の半透明な宝石の一つ。

問一 この詩の形式として適切なものを次のア～エの中から一つ選び、

記号で答えなさい。

- ア 口語定型詩 イ 口語自由詩
ウ 文語定型詩 エ 文語自由詩

問二 線部Aで使われている表現技法を次のア～エの中から一つ

選び、記号で答えなさい。

- ア 直喩法 イ 対句
ウ 倒置法 エ 省略

問三 線部①「陸にむかつてほえ」とありますが、何の様子を表

していますか。適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 光 イ 子供 ウ 波 エ 夜

問四 線部②「人々は 一部屋に集まり 押し黙って 火を囲む」と

ありますが、漁村の人々のどのような気持ちを表していますか。二十字以内で答えなさい。

問五 〳〳〳にあてはまるこの詩の題名としてふさわしいものを

- 次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア 青空 イ 荒海 ウ 漁村 エ 地球

四 次の——線部の漢字はひらがなに、ひらがなは漢字にそれぞれ直しなさい。

- ① 思わず苦笑いをする。 ② 安静にして休む。
③ 荷物に名札をつける。 ④ 地震の前兆が見られる。
⑤ 仮設のテントを片付ける。 ⑥ どりよくをしてレギュラーになる。
⑦ 正しい結論をみちびく。 ⑧ 手洗いをして、えいせいに気をつける。
⑨ そうこに荷物をいれておく。 ⑩ たんとうちよくにゆうにたずねる。

問題は以上です。